近世浄土真宗本堂の研究（そのIX）
守　綱　寺　本　堂

岡　野　　清

STUDY OF MAIN HALL IN JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART IX)　SHUKOJIHONDO

Kiyoshi OKANO

During these few years I have engaged in research after the main halls in the temples of JYODOSHIN sect in TOKAI district and wrote papers on this subject several times, in which I have researched after their original states of these buildings by reading the records preserved in the temples and examining traces made by repairs in the past. This time I report a study after the main hall of SHUKOJI temple of JYODOSHIN sect in TOYODA city.

This temple was found by feudal lord WATANABE family in this place.

So it has peculiar feature, but fortunately it reserves its original state very well.

In this report I have tried to make clear historical characteristics of this building in the early EDO period

本稿は東海地方における近世浄土真宗本堂の研究の続きとなるものである。

守綱寺本堂は三河地方の大名であった渡辺守綱の菩提のため建てられた寺で，近世初期の造営になるものであるが，原形も殆と崩されずに保存されている。大名の一寄進による造営であるため，真宗寺院に多い一般大衆のための寺と趣を異にした点も多いが，それらを考慮した上，その歴史的位置づけを試みることにした。所在地は愛知県豊田市寺部町である。

創立　沿革

三河寺部の初代藩主渡辺半蔵守綱が元和6年（1620）に没したあと，二代重綱が寺部村横山（現豊田市寺部町内）の墓所に一堂を建立して菩提を弔い，横山御堂と称していたが，寛永16年(1639)三代治綱が名古屋興善寺から恵頓を住持に招いて開山とし，真宗大谷派渡辺山守綱寺を設立した。その後治綱は寛永20(1643)年に上宮太子，三朝高僧真影を授かり，翌正保元年(1644)に伏見桃山城の軍事評定所を拝領して現本堂を建て，寺域を整えたと言う。後に元禄4年（1691）に四代定綱が親鸞上人の御影を受けている。

構造様式

大名の菩提寺らしく寺部郷の中心部にあり，西は矢作川に臨み，侍屋敷と隣接していた。寺域は南面し，南北に長く本堂の他に山門，鐘楼，庫裡等があり，本堂裏には

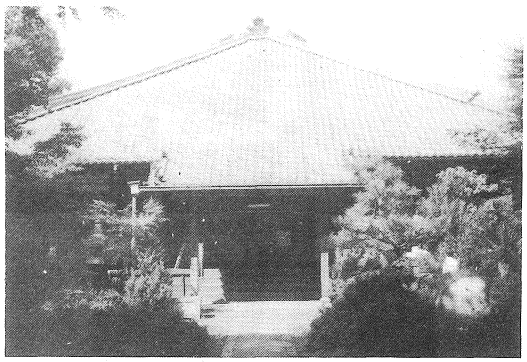

写真1　本堂正面

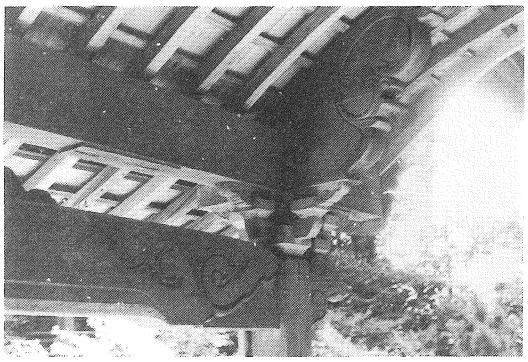

写真2　向拝部分

元和年間からの渡辺家累代の墓が並んでいる。

本堂は南面して立ち，見付7間（実長9間半）奥行10間(実長11間半)の主屋正面に一間の向拝と西側面後半部に一間幅の下屋が付く。屋根は寄棟桟瓦葺で，奥行の方が深く，珍しく妻入りとする（図1，写真1）。降り棟に稚子棟を付けるが，屋根垂みも少なく，棟瓦とも全般に

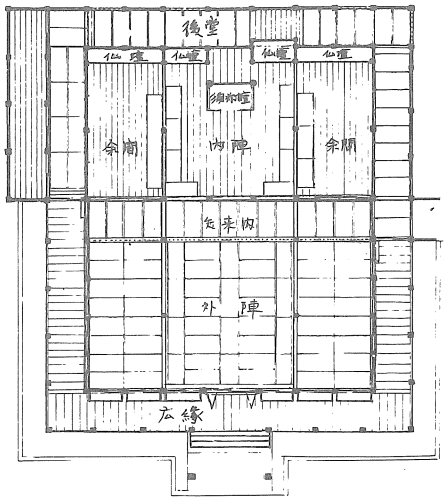

図1　守綱寺本堂現状平面図

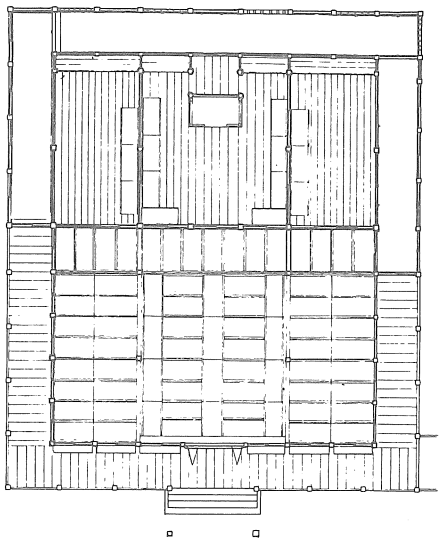

図2　守綱寺本堂復原平面図

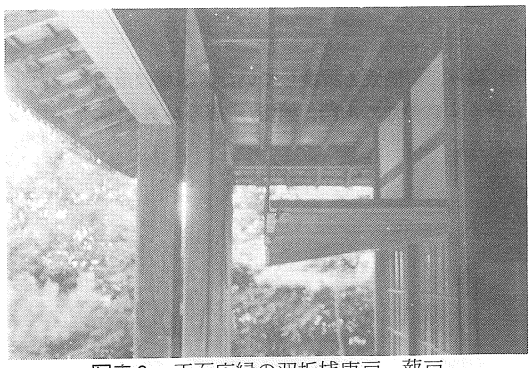

写真3　正面広縁の双折桟唐戸、蔀戸

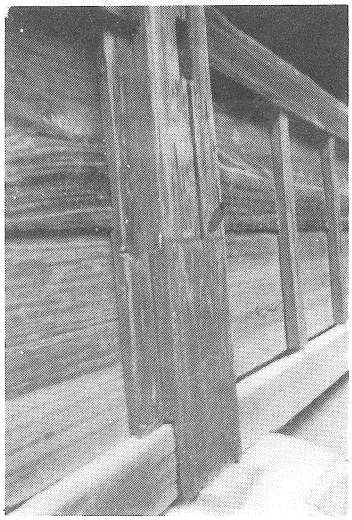

写真4　側柱の根継ぎ

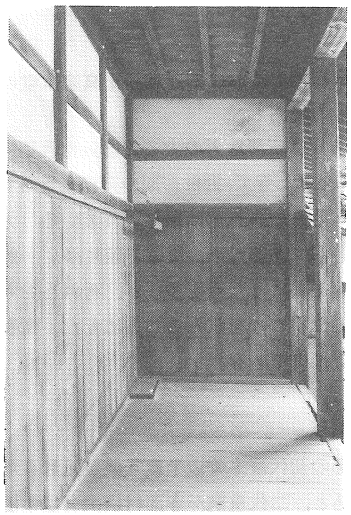

写真5　広縁東側面

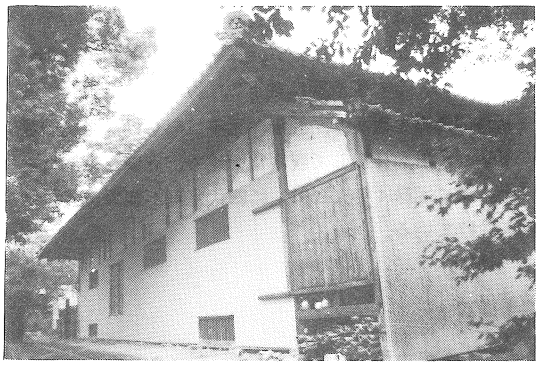

写真6　北西より本堂裏を見る

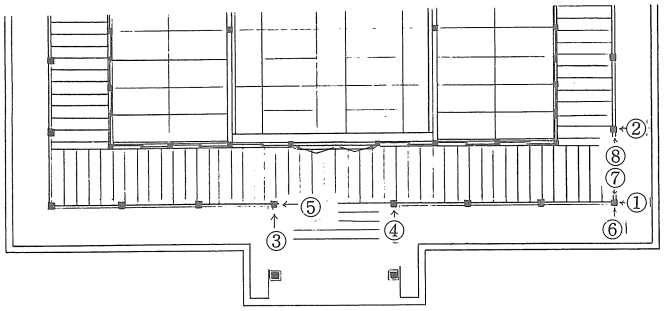

図3　痕跡指示図

簡素な感じで，いわゆる仏堂らしい豪華さはない。軒も一軒疎垂木木舞打で，軒付けの柿葺が残っており，その他の取扱いから見ても特に外陣部分は書院風の意匠である。堂は大きさの割に軒は低く，一般の真宗大寺院に見られるように外部を虹染や高欄で飾ることもなく，更に本堂前半の柱が一律に二尺程根継ぎされていることを見ても（写真4），以前は更に建ちの低い建物を再用した可能性がある。

堂正面に一間の向拝を付けてあるため，軒先はかなり低くなる（写真1）。軒桁下に棟札がありこの部分は明治16年に後補したことがわかるが，広縁側柱に以前の繋梁の

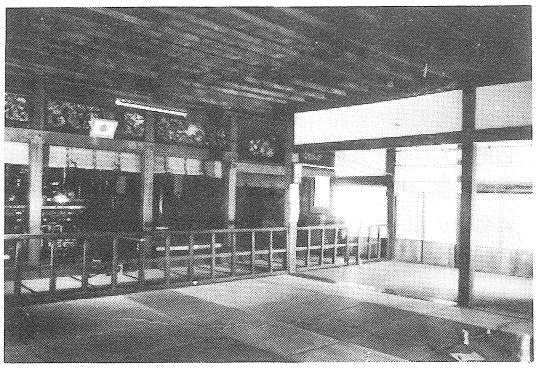

写真7　外　　陣

写真8　矢来内天井絵

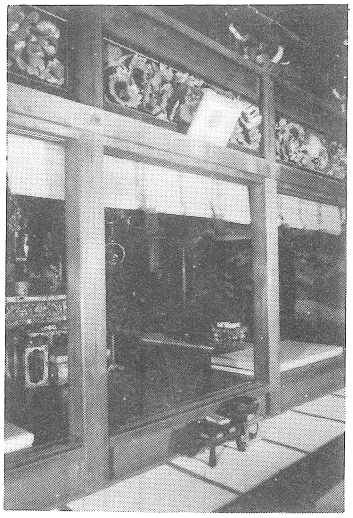

写真9　内陣前

痕跡があるので，従前にもこれに代る向拝があったことであろう（図5）

堂前半を外陣とし，その正側3面に吹放ちの一間幅の広縁を廻らすが，側柱は外陣柱と通りが合わず，柱間隔も実長1.25間とやや長く，落縁もない。外陣側通りとの境は大部分引違い障子に後補の雨戸一本引きとするが，中央間は双折桟唐戸，藁座付で開き，その両脇各3間は蔀戸で戸締り，内側に各間7間とも引違いガラス戸を入れる（図1）。両側面は内法長押，正面は差鴨居として（中央間は一段上げる）その上は飾貫一本付漆喰塗小壁とする。広縁には棹縁天井を張る（写真3，5）。

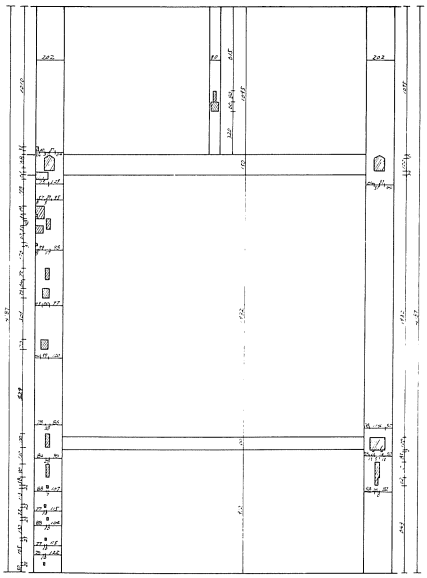

図4　庫裡への通路取付痕跡

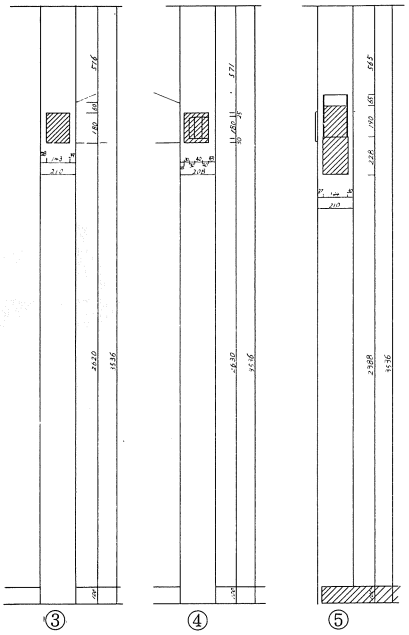

図5　もとの向拝の繋梁取付痕跡

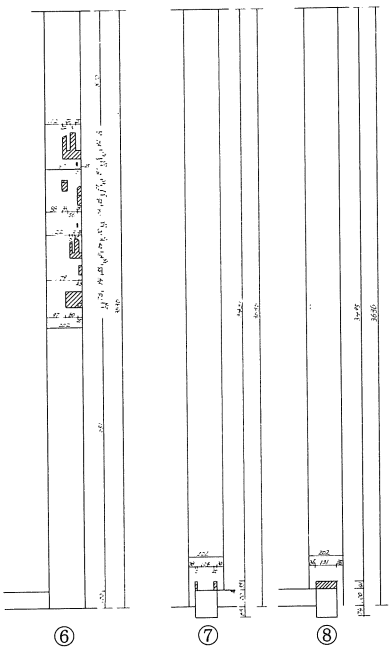

図6　庫裡への通路の敷居框あと，⑥は袖壁か他の痕跡か不明

又西側後方の軒下に下屋を出して現在物置きとなっているが，これは明治項の後補である(図1，2，写真6)。

堂内では外陣を内陣余間と合わせて柱列によって3分し，外陣奥の一間通りを矢来内としてその境に柱を立て，その通りに矢来の結界を固定して設け(写真7)，更に矢来外の2分点にも柱を立て，その柱間に無目敷居を入れて畳敷を区切り，この矢来外の前後の柱間には無目鴨居を通して天井との間に漆喰小壁を下げる(写真7)。外陣内廻りには内法長押をまわして漆喰小壁を作り，天井は矢来内部分だけ一段高い鏡天井とし天女奏楽の絵を大胆に彩画する（この部分のみ桃山時代の板を転用したと伝える(写真8)。他の外陣天井はすべて桁行に通る棹縁天井とする(写真7)。尚矢来内外境の柱の矢来内面には多少風蝕したあとがあり，内陣，余間部分は材も幾分異質なところから，他に余分な仕口がある等の積極的な資料は見出されないが，外陣部分のみが別の遺構を移したものとも考えられる。それ以奥の内陣余間部分等は正保元年（1644）に創建されたものと思われる。

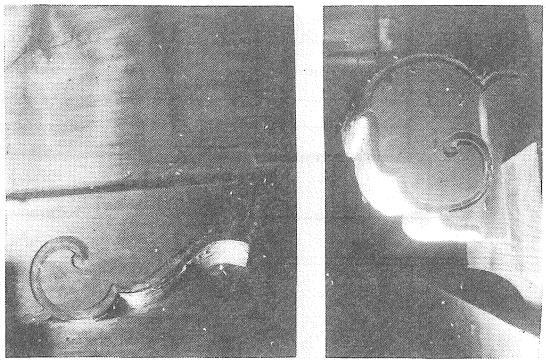

写真10　平三斗の絵様

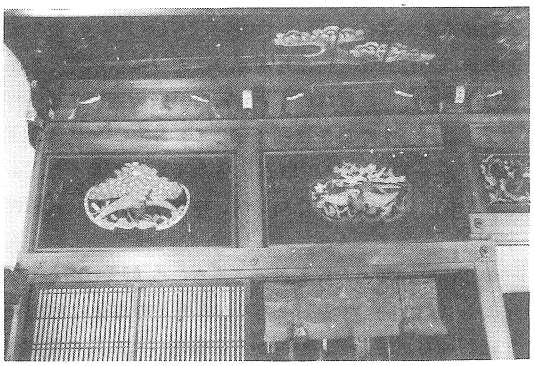

写真11　西余間前

内陣と余間は矢来内より羽目板分だけの上段となり，板張に置畳とする。余間前の建具は柳障子4枚建(内陣前の建具は取外してある)とする。内法長押を内陣前だけ背違いに上げて，頭貫との間は余間前は釣束で2分され，筬欄間の中央に孔雀や鳳凰，獅子の高内彫透し彫(極彩色)を嵌めたものを入れ，内陣前は牡丹，獅子等の透し彫(極彩色）で荘厳する。台輪上には柱上部に唐様平三斗を置き，斗拱間は板小壁とし，中備はない（写真9，11)。

内陣内廻りは仏堂らしく荘厳してあり，両余間境には中央に丸柱を立て（黒漆塗で上部彩色）敷鴨居を入れ，内法長押は四周に廻らし，小壁には天女奏楽を大柄に彩画し，四周とも頭貫，台輪，各柱上には唐様平三斗斗栱を載せ，中備に蓑束を配し，斗栱間板小壁とも雲の紋様を彩画する。更に内法長押，頭貫間も極彩色仕上とする．天井は，几帳面取黒塗格縁に胡粉塗格間板の格天井を張る（写真12）。

中央に黒漆塗を基調とした唐様須弥壇を置き(写真13)，来迎柱は円柱金箔置きで，上部を彩色し，来迎柱間にのみ，頭貫，木鼻，台輪を通し，柱上に隅肘木鬼斗付出組斗栱，中備蓑束をのせ，斗栱間板小壁には渡辺家の家紋を彩画し，来迎柱の上部より上は極彩色で飾る（写真13）。須弥壇後方に後門を開き，後堂へ通ずるが，その両脇に脇仏壇を設ける（東の脇仏壇は奥行を一段深くし，後壁を嵌殺しにしてあり，更にその部分の背後の後窓を引違戸口に改めてある（以上後補）。それは厨子を入れた時に改造したものであろう）。脇仏壇前の柱は2本とも円柱であるが，堂内で円柱を用いてあるのはこの4本と来迎柱及び両余間境の中央に立つ各1本の計6本のみである。この脇仏壇の4本の円柱は黒漆塗とし，脇仏壇も黒漆塗で，廻り壁は金色とし，頭貫の位置に虹梁を架け，台輪をのせて，極彩色とする（写真14）。

東西両余間は対称で，内装は内陣とほぼ同じであるが，外陣を仕切った襖の彩色以外には彩色はなく，落着いている。背面に黒塗余間仏壇を設け，壇前は羽目板の箱仏壇で，上部に虹梁大瓶束を構える。それより上部の頭貫台輪は四周に廻り，各柱上には唐様平三斗を載せて天井廻縁を受け，格天井を張る。両側及び見返りには内法長押をめぐらし，漆喰塗小壁をつくる（写真15，16）。

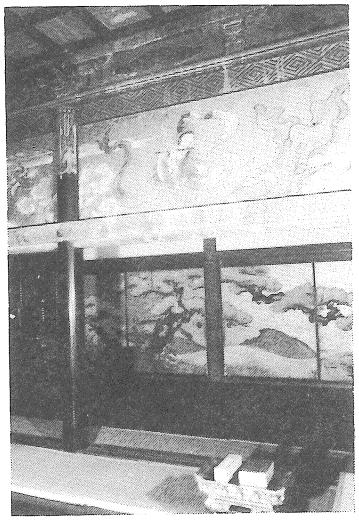

写真12　内陣内廻りと東余間

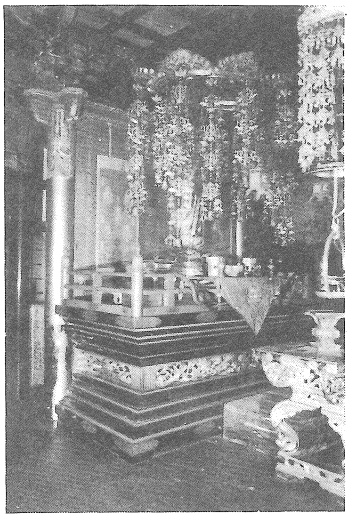

写真13　須弥壇

写真14　来迎柱上部

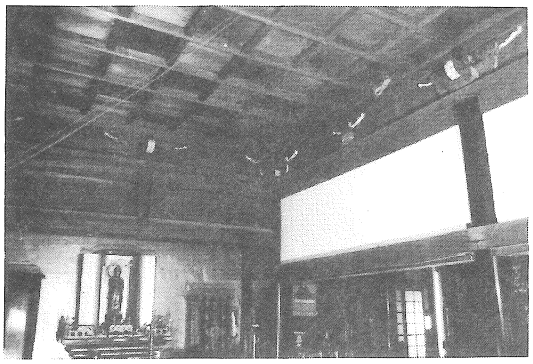

写真15　西余間

東西の飛檐間に当たる部分は一間幅の広縁の延長であるが，西飛檐間は余間に並んで接し，東飛檐間は矢来内横まで延長している。その側廻りは中敷居を入れて，引違戸とし，四面に内法長押，漆喰小壁を廻し，棹縁天井を張る（写真17）。

堂の背面一間は当初から後堂となっており，柱間一つ

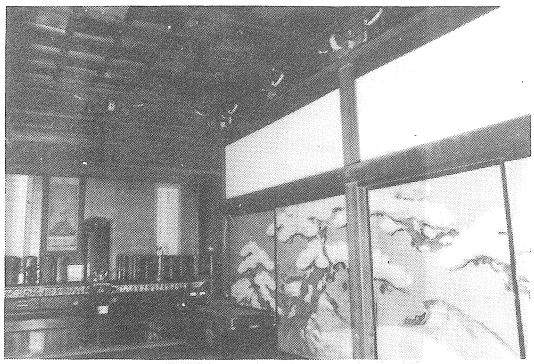

写真16　東　余　間

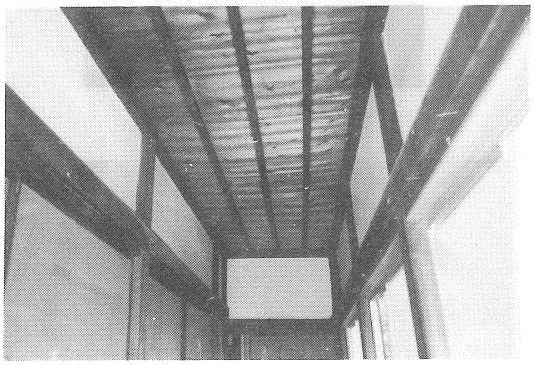

写真17　東飛檐間内

おきに無双窓をつけて明り取りとしているが，前掲の脇仏壇後方は床上から引違戸で開放出来るようにしてある（後補，写真６）。

結び

守綱寺本堂は寺部藩主渡辺家の菩提寺として建立されたもので，大衆としての信徒に支えられる一般真宗寺院とは著しく趣を異にしており，更に軍事評定所を下賜されて建てたと言う関係があってかも知れないが（その点はっきりした証拠を建物自体から提えることは困難であった），特に外陣廻りは邸宅風に扱われているのに対し，内陣余間廻りは相当に仏堂化した派手な手法を用いている。それにしても大衆向きの通俗化ではなく気品のある意匠を見せていることは流石で，当時の武士階級の趣味を思わせるものがある。

なお当堂は後世の改造が殆んど加えられておらず，建立当初の状態が極めてよく知られる点でも貴重な存在と言える。

（受理　昭和55年１月16日）